

CAN-DO 活用と英語語彙指導を融合した発信技能育成の試み

－福井県教育総合研究所での実践－

特別研究員

投野由紀夫

2020 年度に実施される新学習指導要領の目指すところは、知識・技能に留まらず目的・場面・状況に応じて「ことばを使ってタスクを遂行する」というヨーロッパ言語共通参照枠（以下 CEFR）で用いられている CAN-DO 的な発想である。新学習指導要領の目標の具体的な目指すべき力と、それを構成する英語基礎語彙のモデルを提案し、福井県教育総合研究所が編纂した『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集（増補版）』の試みを紹介する。

〈キーワード〉 CEFR、CAN-DO、英語語彙指導、発信・受信

I 新学習指導要領と CEFR

新学習指導要領の改訂では、目標設定の方向性が「知識・技能」だけでなくそれを使いこなす「思考力・判断力・表現力」を養う、という点が鮮明になった。これは CEFR の「コミュニケーション能力」が単に言語知識を中心とした「言語能力 (linguistic competence)」に留まらず、場面・状況に応じた言語使用を行う「語用論的能力 (pragmatic competence)」、「社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)」、またコミュニケーションが円滑に進むようにさまざまな方略を練る「方略的能力 (strategic competence)」などから構成される、という考え方を言語教育に投影したものと見える。

CEFR に影響を受けたことを示す改訂の大きな変更点が 2 つある。1 つは、従来の 4 技能から「聞くこと」「読むこと」「話すこと：やり取り」「話すこと：発表」「書くこと」の 5 領域に変更したことである。この「領域」を「5 技能」と言わなかったのは、前述の「知識・技能」レベルを超えた学びの力を新学習指導要領全体で謳っているため、誤解を招きがちな「5 技能」をやめ「5 領域」と称したわけである。この 5 つの分類は、2001 年に制定された CEFR の自己評価表 (self-assessment grid) における 5 技能に準じている。CEFR そのものは産出 (production)、受容 (reception)、媒介 (mediation) というスキル区分を大きくは持っており、2018 年改訂の Companion Volume ではこれらをもとにより詳細なスキル区分が提示されているが、国際的に現状の CEFR 対応の言語テスト、各国で CEFR の実行のために活用されている European Language Portfolio (ELP) の中身、また主要な EU 諸国の外国語シラバスは上記の自己評価表に掲載されている 5 領域で目標設定を記述したものが大多数であるので、今回の改訂では新版の詳細枠に依らず、従来の 5 領域を採用したのは妥当な選択である。

第 2 の変更点は目標記述が「…できる (ようにする)」という CAN-DO 的な記述に全面書き換えになった点である。この目標記述の方法は、緩やかに CAN-DO の内容を規定する次の 3 つの要素に基づいた記述を行っている：

- (1) 何ができるか (action, performance)
- (2) どのような条件下でできるか (condition)
- (3) どのくらいよくできるか (criteria)

この 3 種類の記述が一貫していると CAN-DO を配列する際の難易度の判定が明確になる。CEFR の自己評価表の CAN-DO は総じてこのような基準で記述が行われている。

II 新学習指導要領の目標記述の特徴

この CAN-DO 目標記述の方法をもとに、新しい改訂学習指導要領の目標文を分析してみる。そうすると、小学校・中学校・高等学校の各レベルで具体的なキーワードが整理できる。それを学校種別に簡単にまとめてみる。

1 小学校

小学校の新学習指導要領のキーワードは図1のようにまとめられる。

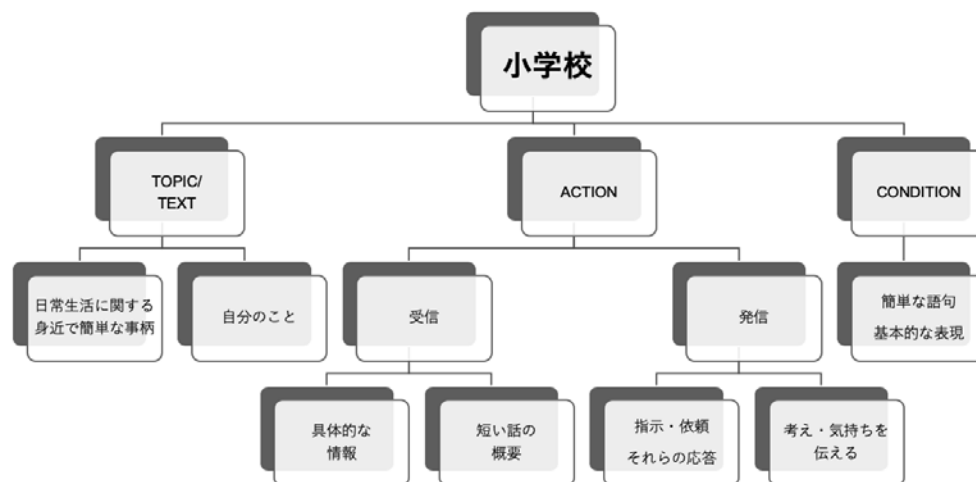


図1 CAN-DO 構成要素的にみた新学習指導要領のキーワード（小学校）

まずトピックは「自分のこと」「日常生活に関する身近で簡単な事柄」で、これらは CEFR でいう A1 レベルの私的な (personal) 身の回りの事柄である。それを条件としては「簡単な語句や基本的な表現」を使ってできる、という部分も A1 レベルの記述を踏襲している。受信技能については「具体的な情報」「短い話の概要」がわかる、発信技能については「指示・依頼とその応答」、「考え・気持ちを伝える」となっている。A1 のきわめて初歩的なレベルではあるが、自分の身の回りの「情報 (information)」の受信・発信、物語などを聞いて「あらすじ (outline)、概要 (gist)」がわかること、また簡単な表現でいいので、「考え (idea/opinion)、気持ち (feelings)」を伝えるという点が CEFR 的な要素を意識した記述になっているといえよう。

2 中学校

中学校の新学習指導要領のキーワードは図2のようにまとめられる。

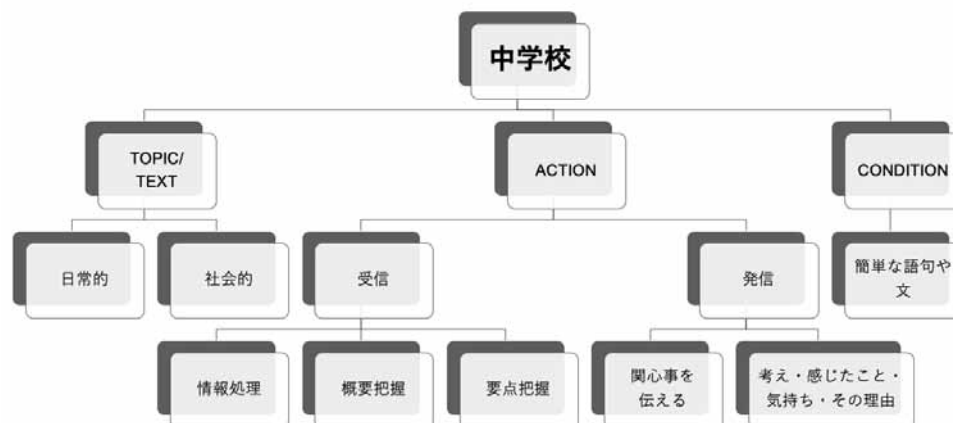


図2 CAN-DO 構成要素的にみた新学習指導要領のキーワード（中学校）

中学校・高等学校は大きなトピック・テキストが「日常的・社会的」な話題という区分になった。厳密に言うと、ここでの「話題」と具体的なテキスト・タイプは異なるのであるが、この部分は CEFR よりも大まかな記述になっている。具体的なテキスト・タイプは「目標」を具体化した「言語活動」部分に詳細が出ているので参照されたい。中学校でほぼ受信・発信でキーワードが出そろっている。これを整理すると以下ようになる：

主に受信技能（聞くこと・読むこと）：

- (a) 情報伝達 (information transfer) : 自分が必要な情報を得ることができる
- (b) 概要把握 (outline; gist) : 叙述文の概要を把握することができる
- (c) 要点把握 (main points) : 説明文の要点を把握することができる

主に発信技能（やり取り・発表・書くこと）：

- (d) 関心事を伝える
- (e) 考え・その理由、感じたこと・気持ち

これらの要素は基本的に高等学校に行っても本質的に変わらない。ここで大切なのは受信としてどのようなテキスト・タイプを扱うか、という点である。British Council/EAQUALS Core Inventory for General English を参照すると、CEFR レベル別に扱いたいテキスト・タイプの分布が出ており、それをもとに上記の(a)-(c)を補足してみると表1のようになる：

表1 情報・概要・要点に関連したテキスト・タイプの一覧 (Core Inventory を参考に)

	テキスト・タイプ	A1 (小～中1)	A2 (中2～高1)	B1 (高1～高3)
情報伝達	標識・看板・案内図、メニュー・地図・時刻表			
	説明書・簡単な規則や約束事のリストなど			
	簡単な書類、見積書			
	イエロー・ページ、カタログ、Web ページ			
	公的文書、技術文書			
概要把握	新聞、雑誌の記事			
	日記			
	叙述文 (narratives)			
要点把握	小説・文学作品		simplified	
	論説文			
その他の媒体	書評、社説、論評			
	ハガキ			
	ツイッター			
	手紙 (informal なもの)			

これを見ると、情報伝達、概要把握、要点把握のそれぞれに教材として扱うテキスト・タイプが想定でき、それらには CEFR 的な難易度レベルが規定されている。まずは A1 レベルで扱えそうなものから徐々に高度化していくなどの工夫が望まれる。またヨーロッパと日本では少々事情が異なる場合がある。たとえば、論説文などは Core Inventory では B1 レベルから本格的には扱っているが、日本は中学から日常的な話題以外に社会的な話題に触れさせており、環境問題や社会問題も教科書で題材として広範に

扱われている。その点で、日本の教科書では英語は基礎レベルでも論説文的なテキスト・タイプを早い時期から触れさせているという個別の事情がある。そのへんは適宜、提示時期は配慮すればよい。

新学習指導要領の「できること」を図1・2のようなキーワードで把握すると同時に、表1に見られるような、触れさせる「テキスト」のバリエーションを把握しておくことが大切である。このようなテキスト・タイプ別の処理が4技能検定試験では実際によくタスクとして問題に出てくる。その意味でも実用的な場面・状況で触れるテキスト・タイプのバリエーションとその読み取らせ方の幅を考慮して指導することが受容技能では肝要である。

一方、発信技能はこれらの受信技能で扱うテキスト・タイプ別に、事実・概要・要点を理解し、自分で内容をまとめて第三者に伝達できる、また詳細の事実の確認などのやり取りができる、内容に関して自分なりに感想として感じたことや意見などを言える、といった受信内容をもとにした発信が重要な位置を占めている。

Ⅲ コーパスから見る語彙力モデル

新学習指導要領で、全体の目標が捉えられたら、次におさえておきたいのは、英語力の基礎となる語彙力モデルである。詳細については、投野(2015)に解説しているので参照されたいが、ここではその概略を述べる。言語はその使用特性として、一部の文法的機能の強い語が高頻度に使用され、それ以外の低頻度語が大量に存在する。英語も例外ではない。1億語のBritish National Corpus(以下BNC)の話し言葉コーパス1000万語の分析では、頻度上位100語(見出し語換算)でデータ全体の67%を占める(投野, 2015, p.12)。そしてBNC上位2000語までを見ると、話し言葉の9割、書き言葉の8割がカバーされる。もちろん2000語のみでは必要十分とはいえないが、この基本2000語をアウトプットできるように訓練することが高等学校卒業時までの重要な目標となる。

なぜ2000語か、と問われれば、語彙分析で2000語のあと、2000語ずつ4000, 6000, 8000と加えていった場合、2000語までで83%カバーされた後は、カバー率はそれぞれ5、3、2%程度しか伸びない。それほどに最初によく使う2000語の有用度にして、4000~8000語レベルの単語は使い手がいない。これならば、2000語レベルの単語を十分に活用できるようにトレーニングしておいた方が基礎英語力は高くなる(図3参照)。

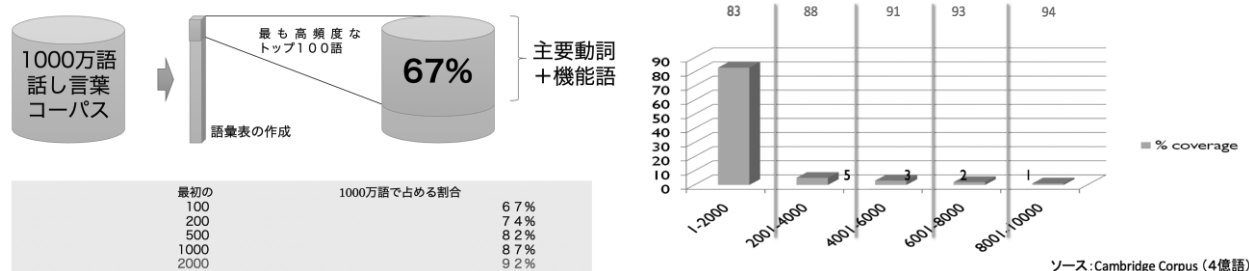


図3 基本語彙100語、2000語の特徴

Ⅳ 福井県の『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集(増補版)』の試み

私が提示した上記の新学習指導要領のポイントと英語語彙の基礎学力モデルを参考に、福井県教育総合研究所ではコーパスとCEFRの資料を活用した英語表現集『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集(増補版)』(2019)(以下、『英語表現集(増補版)』)の作成を試みた。最後にこの『英語表現集(増補版)』の特徴をいくつか解説する。

- (1) 全体の表現すべき意味領域の構造は CEFR の概念・機能の分類を基礎にしている
目次を見ると、各章はⅠ.「事実・情報を伝える」、Ⅱ.「気持ちや感情を伝える」、Ⅲ.「考えや意図を伝える」となっている。これは中学校から高等学校の発信の目標に出てくるキーワードをまとめた分類で、CEFR の母体となる Threshold Level 1990 (van Ek & Trim, 1991)の機能分類にも近い。Threshold との違いはいわゆる *suasion* (相手を説得してものごとを成し遂げること) の項目がほとんどないことであるが、これは A2 レベルの買い物や海外旅行などでの *transaction* (交渉) などの機能で多用されるものなので、学校教育の教室内タスクだと練習する機会が少ないという意味で項目から外されたとしても理解ができる。
- (2) 例文に CEFR レベルを表記している
また各例文には主観的な判断を含むが、例文の推定 CEFR レベルと、使用単語の CEFR レベル (CEFR-J Wordlist による) が付与されており、これによって中学校の初期段階と 2-3 年で使用する表現の大きな判断ができるようになってきている。このへんもあまり市販の単語集にはない機能である。
- (3) 中学生の目線で自己表現のためのフレーズと例文が豊富に掲載されている
下位項目は、中学校の教室環境や学校でのさまざまな活動場面・状況をよく考えて、中学生が言語活動をする際に言いたいことをアンケートなどで収集した結果をもとに構成されている。このような言語使用調査は Threshold Level でもフランス語やポルトガル語版の作成時に実態調査が行われており、福井県の中学生在が何を発信したいのか、生徒たちに寄り添おうという姿勢の表れとして評価できる。
- (4) コーパス・データを参照してできるだけ活きた英文を掲載しようと心がけている
中学生の発信する内容なので、すべてが生徒の英文から採取することは困難であるが、表現の頻度情報をフレーズ選定の際に BNC を参照しながら判断している。これによって、同じ日本語を表現する英語が複数あった時、どれがよく用いられる表現かをデータから示そうという意欲が見られる。
- (5) NHK 英語データベースの情報を活用している
福井県は NHK エデュケーションの協力を得て、NHK 英語データベース (投野が監修) から基礎英語の 10 年分の会話資料を活用して、データの補充をしている。これによって、例文の活用度がさらにアップしたものになっている。
- (6) 福井県独自の郷土の風土・風物・偉人等を紹介する英文が大量に含まれている
この表現集が福井県独自のものであることを示す大きな特徴は、福井の様々な行事、特産品、観光地など、福井を紹介するための英語表現が豊富なことだ。また福井から出た偉人、英語教育の恩人である William E. Griffis 博士とその「ファーストリーダー」まで掲載されている。

V まとめ

以上のように、福井県は最新の CEFR の情報から過去の福井の先人まであらゆる知見を活用して英語教育の改革を試みている。新学習指導要領の完全実施を控え、福井県の英語教育改革の動向は今後大いに注目すべきものとなるであろう。

《引用文献》

○van Ek, J.A. & Trim, J. (1991). *Threshold Level 1990*. Strasbourg: Council of Europe.

《参考文献》

- 投野由紀夫 (2015). 『発信力をつける新しい英語語彙指導：プロセス可視化とチャンク学習』東京：三省堂
○福井県教育総合研究所 (編) (2019). 『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集 (増補版)』